様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０９５０

研究課題名（和文）中途難聴者のメンタルヘルスを向上するための心理的支援策の検討

研究課題名（英文）Psychological support for hearing impaired people to improve mental health

研究代表者
勝谷　紀子（Noriko, Katsuya）

青山学院大学・社会情報学部・助教

研究者番号：９０５９８６５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，難聴者がメンタルヘルスを悪化させないような心理的支援を行うための総合的な支援策を立てることを目的として，難聴者のメンタルヘルスに大きく影響すると考えられる複数の要因をとりあげ，その影響を検討することにした。具体的には，聞こえの状況，コミュニケーション手段，健聴者による難聴者の困難の見過ごし，難聴者に対する態度などをとりあげた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated the factors that influenced the mental health of hearing impaired persons in order to formulate comprehensive support plans to provide psychological support to maintain mental health of hearing impaired people. Specifically, we examined the situations of hearing, communication means, overlooked difficulties of hearing-impaired people by hearing listeners, and attitudes towards hard of hearing people.

研究分野：心理学

キーワード：難聴　精神的健康　ストレス　不安　心理的支援

１．研究開始当初の背景

病気や怪我などさまざまな理由により難聴になった者(以下，難聴者)は，聴覚の低下によって日常生活で多様なストレスを経験する（山口，2003）。また，難聴者は，健聴者にくらべてメンタルヘルスの指標の程度が悪いことが複数の研究で示されている（Kobayashi，Tamiya，Moriyama，& Nishi，2015;高宮・藤田，2005;滝沢，2000）。そのため，難聴者が難聴にもとづくストレス経験がもとでメンタルヘルスを損ねることがないよう，心理的支援を行う必要がある。

そこで，本研究では，難聴者がメンタルヘルスを悪化させないような心理的支援を行うための総合的な支援策を立てることを目的として，難聴者のメンタルヘルスに大きく影響すると考えられる複数の要因をとりあげ，その影響を検討することにした。

２．研究の目的

本研究の大きなねらいは，難聴者への心理的支援策を策定することである。心理的支援策に含める内容を決定するため，難聴者への精神的健康に影響する以下のような要因について検討した。

(1)健聴者による難聴者の困難の見過ごし

難聴者は日常生活において聞こえにくさに端を発する様々な困難を抱えている。ただし，難聴者についての問題は，こうした困難の存在だけでなく，困難が健聴者から見過ごされるところにもあるのではないかと予測されている（山口，2003）。そこで，本研究では，(1) 健聴者は難聴者が抱える困難を見過ごすのかどうか（調査 1），(2) 健聴者の無理解（困難の見過ごし）は難聴者のメンタルヘルスを低下させるのか（調査 2），(3) 健聴者が難聴者の日常生活上の困難を見過ごさないようにするために必要な要因とは何か（調査 3），について調査した。

(2) 難聴者に対する態度

筆者の分担においては，難聴者が精神的健康を損なう健聴者の偏見的態度について，接触の要因に着目してレビューや調査・実験を行う予定であった。レビューにおいては「聴覚障害者」「難聴者」「中途失聴者」に対する態度について直接問う質問紙研究が多いことがわかった。さらに，イメージや感情は比較的ポジティブなものがみられる一方，コミュニケーションの場面ではその態度がネガティブであることが先行研究から示された。

これらのことから，次の点を検討する必要性が見出された。例えば補聴器や人工内耳等をつけていない難聴者が難聴であることを開示していない場合，健聴者は難聴者と気づかずに接触している可能性がある。そして，そのような場面では健聴者は難聴者を「聞こえる」対象とみなしてコミュニケーションを行っている可能性が高い。その際の印象は事前に聴覚障害を有する人と認識した上での印象とは異なるであろう。

そこで，可視性の程度と障害開示という難聴者の側の要因を考慮し，コミュニケーションにおける健聴者のネガティブな態度の調整要因を明らかにする必要があると考えた。

本研究では，障害開示の有無によって難聴者に対する態度がどのように異なるのか，また開示の有無に関わらず，難聴者に対する否定的態度に影響を及ぼす要因を明らかにする。

(3)難聴者への心理的支援の内容

難聴者への心理的支援策を策定するためには，難聴当事者が心理的な面での支援について何を望んでいるのかを明らかにする必要がある。そこで，難聴者の心理的支援に必要な支援内容，支援方法，支援のニーズを把握するために，難聴当事者を対象にインタビュー調査を実施した。

(4)難聴者のメンタルヘルスに関与する要因

難聴者は，難聴の程度だけでなく，難聴のタイプ，難聴を自覚した時期（いつから聞こえにくくなったか），普段のコミュニケーション手段（手話がメインか音声言語がメインか），聞こえにくさによるさまざまなストレスにどう対処しているのか，「難聴である自分」についてどう認識しているのかなど，その様相は非常に多様である。

そこで，難聴者を対象に調査を行い，難聴者の精神的健康に関与すると考えられる要因を明らかにすることとした。

３．研究の方法

「研究の目的」で述べたそれぞれの目的ごとに，研究の方法を述べる。

(1)健聴者による難聴者の困難の見過ごし

調査１

難聴者が日常生活でどの程度困難を抱えているのか，また，健聴者は難聴者が日常生活でどの程度困難を抱えていると考えるのかを調査した。そして，両者が考える困難の程度にずれがみられるのかどうかを検証した。

①参加者　難聴者 58 名（男性 17 名，女性 41 名，平均年齢 44.05 歳，SD = 11.85），健聴者 124 名（男性 49 名，女性 75 名，平均年齢 18.19 歳，SD = 0.45）

②手続き　難聴者には郵送で調査を行い，日常生活の 9 つの各状況でどのくらい困ることがあるかを 4 件法で回答を求めた。健聴者には集団調査を行い，複数の条件から難聴者をイメージさせた。次に，上述した日常生活の 9 つの状況で，イメージした難聴者がどのくらい困ることがあると思うかを尋ねた。

調査２

難聴者のメンタルヘルスと難聴者がこれまでに健聴者から理解してもらえていないと感じた経験との関係について検討した。

①参加者　調査１と同じ難聴者 58 名
②手続き　郵送調査を行った。難聴者のメンタルヘルスを測定するため GHQ30 への回答を求めた。さらに，これまでに健聴者から理解してもらえていないと感じた経験があるかどうかを尋ねた。
調査３
　健聴者が軽度難聴者の日常生活上の困難を見過ごさないようにするために必要な要因について調べた。特に，健聴者の難聴・難聴者に関する学習経験，難聴者との接触経験，相手の立場に立って考えようとする姿勢（視点取得）に着目して検討した。
① 参加者　健聴者 40 名（男性 20 名，女性 20 名，平均年齢 19.68 歳，*SD* = 1.31）
② 手続き　調査は個別に行った。まず，参加者には，音声刺激（軽度難聴者と健聴者の会話）をスピーカーで流した。次に，参加者には，音声刺激の軽度難聴者が日常生活においてどの程度困難を抱えていると思うかを尋ねた。続いて，多次元共感性尺度（桜井，1988），難聴者との接触経験を尋ねる質問，難聴・難聴者に関する学習経験を尋ねる質問への回答を求めた。

(2) 難聴者に対する態度
調査１
　健聴者と難聴者のコミュニケーションを含む実際の事例を通して，難聴者への偏見低減にどのような要因が重要であるのかを抽出する。それにあたって，難聴児のいる学級の担任教師にインタビューを行う。また，その要因を大学生を対象とした調査によって検証する。
調査２
　調査１の結果を受けて，難聴者と健聴者のコミュニケーションに関するモデルを大学生を対象とした調査によって検証する。

(3)難聴者への心理的支援の内容
　難聴者を対象にインタビューを実施した。インタビュー協力者は，難聴者 11 名だった。
　インタビューの内容は，聞こえの状況，難聴であることに伴う困りごと，困りごとへの対処，偏見的な態度や振る舞いを受けた経験，必要だと考える心理的支援などであった。インタビューは，半構造化面接の手法を用いて行った。協力者がインタビューを受けやすいように筆談やパソコンでの文字表示などを適宜用意して配慮を行った。インタビューの内容は文字に起こして記録し，分析に用いた。

(4)難聴者のメンタルヘルスに関与する要因
　メンタルヘルスを左右する要因に関する難聴者を対象にした調査を行った。調査協力者は 115 名（男性 45 名，女性 70 名，平均年齢 43.55 歳，標準偏差 12.22）であった。
　調査の主たる内容は，難聴に関する属性（補聴器装着の有無，障害者手帳の有無および等級，聴力の程度，ふだんのコミュニケーション手段など），心理的特性（一般的セルフ・エフィカシー尺度，精神的回復力尺度など），メンタルヘルスの指標（うつ，自尊感情）であった。調査はウェブ経由で実施した。

４．研究成果
　研究成果について，「研究の目的」で述べたそれぞれの研究目的ごとに述べていく。
(1)健聴者による難聴者の困難の見過ごし
調査１
　9 つ中 6 つの状況（例：受付，窓口，レジで会話する）で，難聴者が回答した困難の程度に対して，健聴者が回答した困難の程度は低かった。健聴者は日常生活の多くの状況で，難聴者の困難を低く認識することが明らかになった。
調査２
　これまでに健聴者から理解してもらえていないと感じた経験がある難聴者ほど，メンタルヘルスが低いことが示された。これは，健聴者の無理解が難聴者のメンタルヘルスの低下につながることを示唆する結果である。
調査３
　健聴者の多くが，軽度難聴者は日常生活上の困難を抱えていないと認識することが示された。さらに，学習経験がない者，視点取得が低い者は，そうでない者よりも軽度難聴者が困難を抱えていないと考える傾向が強かった。健聴者が難聴者の困難を見過ごさないようにするためには，健聴者が難聴・難聴者について学ぶ機会を設けることや，難聴者の立場に立って考えようとする姿勢を育むことが大切であると考えられる。
まとめ
　本研究の結果は，健聴者は難聴者が抱える困難を見過ごすことがある，という山口（2003）の仮説を一貫して支持するものであった。また，健聴者による無理解（困難の見過ごし）は，難聴者のメンタルヘルスにも影響を与える重要な問題であることが示された。難聴者のメンタルヘルスを向上させるためには，難聴者が「健聴者から理解してもらえている」と感じられることが大切であり，健聴者の難聴者への理解を高めることが必要である。本研究の結果を踏まえると，健聴者が見過ごしやすい難聴者の困難について教えることや，相手の立場に立って考えようとする姿勢を身につけさせることが難聴者への理解を高めることに有効であると考えられる。

(2) 難聴者に対する態度
調査１
　難聴児が在籍する学級の変化を担任教師にインタビューしたところ，学級は次のような過程を辿ったことがわかった。当初難聴児に対するからかいやいじめのような雰囲気があった。しかし，担任教師は難聴児へのま

なざしについて，子ども達に内省を促した。同時に，子ども達の中に失敗を恐れたり回避したりするような様子がみられたことから，上手い下手に関わらず人前で歌う取り組みを空き時間に実施した。すると，子ども同士の関係や授業での様子が主体的に変わっていき，難聴児も自ら歌うために前に出ていき，その際に周囲が嘲笑や不安を表すことはなかった。

これらのことから，児童は失敗に対してネガティブな評価をしており，そのことが難聴児が示す聞き漏らしや聞き間違いを望ましくないものと捉え，難聴児への態度が厳しくなっていることが考えられる。しかしその失敗に対する価値観を変える取り組みによって，自らの学習姿勢のみならず難聴児への態度も好転することが示唆された。

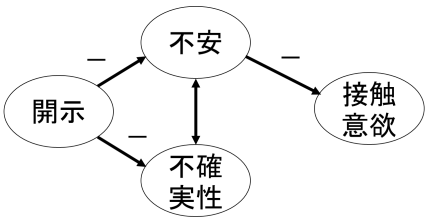
この仮説をさらに検証するものとして，大学生 155 名を対象に 2 つの質問紙を実施した。質問紙１では，難聴学生への態度（河内，2004）と失敗に対する価値観（池田・三沢，2012），接触経験等の相関関係を調べた。なお，聴覚障害学生は，補聴器等をつけ見た目でわかる条件（可視）とわからない条件（不可視）を設けた。その結果，失敗回避欲求の高い者ほど，難聴が不可視である条件において，よりネガティブな態度を示すことがわかった。質問紙２では，ネガティブな失敗観が難聴者への否定的態度に影響を及ぼすかという因果関係を明らかにするために，失敗観の操作をした上で質問紙実験を大学生 146 名に行った。しかしながら，因果関係の検証は明らかにできなかった。

調査２

難聴者へのネガティブな態度の要因として，失敗観は核心的でない可能性が調査１の成果から伺える。この点を追究するために，研究蓄積が多く，コミュニケーション上のすれ違いが生じやすい異文化間相互作用モデルに関する文献を精査した。そこから，難聴者と健聴者の相互作用に影響を及ぼす要因として，不安と不確実性を抽出した。

健聴者と難聴者の相互作用について場面想定の質問紙を大学生 300 余名に実施した。その際，学生が難聴であることを開示している条件としていない条件を設けた。その結果，難聴を開示している方がしていない方よりも，接触意図が高かった。このことは，開示によって難聴者が示す聞き間違い等の振る舞いを障害に帰属しやすくなるため，不安や不確実性が下がり，接触意図が高くなったと考えられる。今後も検討の余地のある結果であるが，難聴者と健聴者がコミュニケーションをする上で壁となっている心理的要因やモデルが示唆された（図）。

今後の課題としては，モデルの精査や難聴者がメンタルヘルスを減じることなくコミュニケーションをとる上で，実際にどのような啓発や取り組みが可能であるのかを検討していくことである。



図．難聴者とのコミュニケーションにおける健聴者の不安･不確実性回避モデル

(3)難聴者への心理的支援の内容

インタビューで難聴者から聴取した内容を文字に起こし，回答の内容を分類・整理した。まず，個々の協力者の回答をそれぞれ分類・整理してから，協力者全員の回答をとりまとめていった。その結果，難聴者への心理的支援が必要な具体的な内容や状況についてあげられた。たとえば，難聴者に寄り添うこと，難聴者同士が交流できる場を作ることなどがあげられた。

その他，心理的支援以外にも，今後必要な支援策があげられた。たとえば，情報を提供する形の支援，難聴者が生活しやすくなる社会の仕組みをつくることなどもあげられた。

(4)難聴者の精神的検討に関与する要因

ウェブ調査で得られた調査データを分析した。難聴者の聞こえに関する属性や心理的特性とメンタルヘルスとの関連を検討した。

その結果，次のような結果が主に示された。

①調査回答者の聴力が低いほどメンタルヘルスの程度が悪いとは限らず，むしろ身体障害者手帳を取得していない難聴者の方が精神的健康の指標が低いことが示された。

②身体障害者手帳を持っている回答者（手帳あり群）と持っていない回答者（手帳なし群）に分けて，心理特性の得点を比較したところ，「一般的セルフ・エフィカシー尺度」と「自尊感情尺度」について有意差がみられた。手帳あり群のほうが手帳なし群よりも，いずれの得点も高いことが示された。

③調査回答者全体における難聴の自覚時期の平均値を基準にして，自覚の早かった人（早期自覚群）と遅かった人（非早期自覚群）に分け，心理特性の得点を比較した。その結果，うつの程度を調べる CES-D という質問項目において，早期自覚群が非早期自覚群よりも得点が高いことが示された。

④回答者全体における難聴と診断された時期の平均値を基準として，診断された時期が早かった人（早期診断群）と時期が遅かった人（非早期診断群）に分けて，心理特性の得点を比較した。

その結果，「精神的回復力尺度」という質問項目について差がみられた。早期診断群のほうが非早期診断群よりも得点が高いことが示された。つまり，難聴だとわかった時期が早かった難聴者の方が，時期が遅かった難聴者にくらべて，精神的な面での落ち込みからの回復を促すような心理的特性の程度が

高いことが示された。
　以上のことから，難聴の程度や難聴だとわかった時期によってメンタルヘルスや心理特性の程度が異なることが示された。そのため，難聴の程度や難聴だとわかった時期に応じて，きめこまかい心理的支援をしていく必要があると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
(1) 勝谷紀子・栗田季佳・名畑康之（2016）難聴者における精神的健康の問題と心理的支援のあり方について，青山社会情報研究，8，47- 55.（査読有）

(2) 栗田季佳・中野慎也・荒川哲郎・名畑康之・勝谷紀子（2016）難聴者に対する態度と失敗観：価値観の変容から他者の評価へ，三重大学教育学部研究紀要，67，149-160.（査読無）

〔学会発表〕（計 12 件）
(1) 勝谷紀子　難聴と精神的健康，日本特殊教育学会第 54 回大会，朱鷺メッセ（新潟県新潟市），2016 年 9 月 18 日

(2) 栗田季佳　聴覚障害児のインクルーシブ教育と偏見・差別，日本特殊教育学会第 54 回大会，朱鷺メッセ（新潟県新潟市），2016 年 9 月 18 日

(3) 名畑康之　難聴者の日常生活での困難さを健聴者はどのように捉えているのか，日本特殊教育学会第 54 回大会，朱鷺メッセ（新潟県新潟市），2016 年 9 月 18 日.

(4) Katsuya, N., Kurita, T., & Nabata, Y. Prejudice and necessary support toward hard-of-hearing people: An interview survey, The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, July, 27, 2016.

(5) Nabata, Y., Nabata, R., Kurita, T., & Katsuya, N. Effects of empathy on hearing people's perception of the difficulties hearing-impaired people face in daily life, The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, July, 26, 2016.

(6) 勝谷紀子　難聴者へのインタビューからみた難聴者の偏見，日本心理学会第 79 回大会，名古屋国際会議場（愛知県名古屋市），2015 年 9 月 22 日

(7) 栗田季佳　難聴の可視性と難聴者に対する態度.～態度と価値観の関係に着目して～，日本心理学会第 79 回大会，名古屋国際会議場（愛知県名古屋市），2015 年 9 月 22 日

(8) 名畑康之　難聴者の日常生活支障に対する健聴者の認識，日本心理学会第 79 回大会，名古屋国際会議場（愛知県名古屋市），2015 年 9 月 22 日

(9) 栗田季佳・菊池彩・佐々木千恵・樋口真子・名畑康之・勝谷紀子　音声コミュニケーションに困難を示す人への態度と失敗観―聴覚障害者・吃音者に対する抵抗感―，教育心理学会代 57 回総会，PA045，朱鷺メッセ（新潟県新潟市），2015 年 8 月 27 日

(10) 勝谷紀子　難聴，難聴者について誤解されていること・理解されていないこと，日本心理学会第 78 回大会，同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市），2014 年 9 月 12 日

(11) 栗田季佳　難聴者の理解に必要な態度研究とは？，日本心理学会第 78 回大会，同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市），2014 年 9 月 12 日

(12) 名畑康之　健聴者による聴覚障がい者への高い評価，日本心理学会第 78 回大会，同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市），2014 年 9 月 12 日

[その他]
ホームページ等
中途難聴者のメンタルヘルスを向上するための心理的支援策の検討
https://sites.google.com/site/hearinglosshealth/

６．研究組織
(1)研究代表者
　勝谷　紀子（KATSUYA, Noriko）
　青山学院大学・社会情報学部・助教
　研究者番号：90598658

(2)研究分担者
　栗田　季佳（KURITA, Tokika）
　三重大学・教育学部・准教授
　研究者番号：90727942

　名畑　康之（NABATA, Yasuyuki）
　北海道大学・文学研究科・学術研究員
　研究者番号：90733006

(4)研究協力者
　西村　光一（NISHIMURA, Koichi）
　日本大学大学院・文学研究科・大学院生